



と転じました。

心臓移植を待つ患者の命を
なく人工心臓。この50年で小
型化が進み、機能も進化を続
ける。テルモ上席執行役員で
テルモハート会長の野尻知里
さん(57)は補助人工心臓の
専門家。弱った心臓を助けて
全身に血液を送る遠心ポンプ
の羽根車を磁力で浮かせる
「磁気浮上型」を開発。20
07年、世界で初めて市場に
出した。医師、研究開発者、
そして経営者として「あきら
めない」を貫く。

日本では1997年から心臓移
植ができるようになりましたが、
年間10例ほど。移植を待つ患者は、
ドイツの「自宅にお祝いに伺いま
す。臨床試験の段階から協力して
くれた方で、手術後は節目ごとに
に暮らしている60代の男性もいま

外科医として救えぬ命を目的のあたりに

開発者に転身、永久使用の人工心臓めざす

渡米し新社設立、望み捨てず社員と挑戦

心臓外科医として十数年、時に
は不眠不休で頑張っても救えな
った命がある。どんなに腕のいい
外科医であっても、人工心臓とい
うツールがなくては重症な患者を
救えない。そんな思いが募り、心
臓外科医から人工心臓の開発者へ

日本では推計5000人、移植先進
国の米国でも4000人はいると
されています。移植を待つ患者を
ひとりでも救いたい、そんな使命
感で走り続けてきました。

目標は5年後の生存率72%で
す。これまで人工心臓は、心臓移
植を待つまでの「つなぎ」という
考えでしたが、この補助人工心臓
は永久使用をめざします。

「磁気浮上型」を開発。20
07年、世界で初めて市場に
出した。医師、研究開発者、
そして経営者として「あきら
めない」を貫く。

テルモが開発した補助人工心臓
は、体内に500gほどの機器を
埋め込み、体外で約2kgの駆動装
置を持ち歩きます。ドイツには現
在、手術後4年を迎え自宅で元氣

社したのは91年、39歳のとき
だった。
日々いろいろなことが起きたの

で、開発に費やした16年は、まる
で一瞬のことのようです。大きな
プロジェクトが動き始めたのは、
入社8年目のことでした。あると
き、出張先のスウェーデンに連絡
が入りました。会社が事業性につ
いての報告を求めていると。すべ
ての研究開発の事業性が見直され
ていたのです。研究者にとっては
冬の時代、しかし私はこれをチャ
ンスととらえました。

以前から、米国の人工心臓開発
の国家プロジェクトのリーダーと
知り合いで、会議に時折参加して

笑いながら振り返ったものです。
2000年に渡米、03年米国
子会社テルモハート社を設
立。4人でスタートした事務
所は、いまや社員140人。
12力国の国籍の社員を率いて
開発を続けた。

患者のためあきらめない

①

「私たちが、まさにファンタ
スティック・フォーだったね」と
役員は喜んでさうです。

(聞き手は編集委員 野村浩子)